扉の向こう

３２０

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

扉の向こう

【Ｎコード】

Ｎ５７１４Ｊ

【作者名】

３２０

【あらすじ】

よくある中学の思い出と、その後の話。

ｂｌｏｇ：ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｇ．ｇｏｏ．ｎｅ．ｊｐ／３２０ｙｏ／ｅ／６１５ｅ８３ｃ６３ａ６３４ｃ１ｅ２ｆ６ｂ８７５２５１１４ｅ６７ｅ

【プロローグ】

――――なぁ…死ぬ瞬間ってのはどういうものなんだろな。

いつか、アイツが言っていた。一言のつぶやき。僕はそのとき、なんて答えたんだろう。…多分、ありきたりな返答をして、その場をやりすごしていたのだろうな。

昔の、中学時代の頃の記憶だ。あいまいすぎて、どうも思い出せない。

しかし、なぜ僕は、ふとこのつぶやきを思い出したんだろうか。

あぁ、そうだ。僕は明日確実に死ぬつもりだからだ。

【1】

アイツと出会ったのは、中学3年の夏だった。中学最後の夏、アイツは今まで培ってきた教師への信頼も、友情も、内申点もかなぐり捨てて、このど田舎の町へ引っ越してきた。

まぁ別に、父親の転勤などのよくある理由ではないし、扶養家族の死別や離婚などの込み入った事情によるものでもない。アイツは何を思ったのか、ただ自分が「静かに暮らしたい」という理由で、親や学校や何もかも引っ掻き回して転校を押し通し、大都会から無理やりこの町へやってきたのだ。

「何を考えているんだか…」

本当に何を考えているんだかわからない。隣の家に居座られた僕の身にもなって欲しい。そして奇妙な…とても奇妙な雰囲気をもったアイツに、いきなり友達呼ばわりされて、学校へ連れて行かれる身

にもなって欲しい。
あのころは特にそう思った。
「ねぇ、ユー太くんって彼女いるのかな？」
「あんた友達でしょ？教えて～」
クラスの女子は、こぞって僕に相談を持ちかけていた。そんなことなんて知るか。あいつは家が近所なだけで、特にプライベートなんて知らない。
ただこの女どもは、そのルックスが田舎男どものレベルを、はるかに凌駕しているアイツに近づきたい。少しでも近い存在にある人間を探しているのだ。その一身で僕に話しかけていた。
――お前ら受験だろ、そんなこと考えてる暇ねぇだろが。

そんな記憶がよみがえってくる。あの中学の一日一日は、本当に何気ないことだったのに、それが今では黄金のように貴重な、輝きのある瞬間だと思ってしまう。月日は人を変えるのか、記憶が変わってしまっているのか。

【2】

ある日の放課後だった。部活動の帰り道、道端でアイツと出会った。アイツはいつもと変わらない制服姿で、何をするわけでもなく自転車にまたがりマンガを見ていた。
偶然通りがかった同じ部活の子が、小さくキャーキャーわめいている声が聞こえる。アイドルのルックスを基準にしてしまうと、ジャニーズのT沢クラスだろうか。僕の見る目が間違っていなければ、まぁモテて当然だろうな。
――などと考えているうちに、向こうから声をかけてきた。
「おう。」
「おう、なんだよ。そんなとこで漫画見ててさ。」
「今週号のジャ〇プ。」
「いや、そういうことじゃなくてさ。」

「今週号はやべぇよ、陳遊記の山多太郎がさ…」
なぜ、そこで陳遊記の名前が出てくるんだろう。その顔でその単語はやめて欲しい。とはいえ、こういう奴なのである。クラスの尻軽女に「ヤラせろ」とか言ってみたりして、本気でそういうことになりかけてドロンしたり。よくいるいじめられそうな奴に絡んで、さらにヒドイコトをしてみたり。（ヒドイコトと言っても別に陰湿なものではなく、笑って済ませられる話）
だけど、トラブルメーカーのようでいながら、（逆にそうであるからこそ）いろんな奴と上手く付き合いができている…そんな奴だった。

そんな話を、道端でしているうちに日が暮れて、僕らは一緒に家に帰った。
「じゃあな。」
「おう。」
アイツはまた、静かに家の玄関を開き、消えていった。
僕はただ、アイツの後姿をみているだけだった。またアイツにしてやられた。
あの時、アイツが道でたむろっていたのは、ただ漫画を読んでいるとかそういう意味じゃないのだった。学校で、部活で孤立しやすかった僕のために、ただ待っていてくれた…なんてとこだったと思う。マイペースな振りをして、何か色々なことを見ている。そして色々と考えている。普通の奴は気をつけないところも、アイツはよく気がついてくれた。
アイツはイイ奴であると同時に、自分にはないものを持っている憎らしい奴でもあった。
「――――それでいて、頭もいいんだよな。最低な奴なのに。」

【3】

そんな中、部活も終わり本格的な受験のシーズンとなった。僕らの学校は都会とは違い、公立高校に入れるかどうかがその人の頭のよしあしを決めた。私立に行く奴は、公立高校を落ちた奴か、もしくはスポーツがしたくてそこへ行くかのどちらかだった。あのときは勝ち負けがすべてだったから、「私立＝負け」という図式が成り立ちやすかったと思う。田舎ならではの考え方なのか…
僕の成績は中の上で、中堅の高校には何とかいけるかな、といった所だった。頭も良くないが悪すぎることはない。…テストの点数だけでみたら。
アイツはというと、成績は上の方だったが、なぜか僕と同じ中堅の高校へ進路を希望していた。普通に自分のレベルに合った高校に行けばいいのに、なんでそうしなかったんだろう。内申点とかも絡んでいたのかもしれない。まぁ、今となってはわからないが。

秋になり、教室が一気に受験モードに入った。息苦しささえ感じるくらいの空間を、僕とアイツは黙々と押し黙るのだった。合唱コンクールもあったためか、周りの人間は気持ちが悪いくらいに連帯感を醸し出しながら受験に向けて熱を上げていた。僕とアイツはそれを冷ややかにみていたような気がする。

―――どうしてそんなに、「受験」に目標を定めることができるんだろうかな。

学校の近くには裏山、とはいかないが林のような場所もあり、秋には紅葉が見られた。けれど、まだ子供の、ましてや今年受験の僕たちには何の意味を持たないものだった。紅葉の美しさに風情を感じるのは、もうちょっとあとでもいいと思っていた。
見慣れた風景が、どんどん消えていった。急な工事があって、それが失われたわけではない。けれど、おそらく僕らの心の中では、大きな突貫工事があったのだ。受験受験受験受験…

アイツは、クラスで静かにジッとしているのが耐えられないようだった。バカなことをしようとしても、暴言を吐いてみても、周りは興味を示さない。僕はというと、表向きは受験勉強をしているふりをして、気持ちは別のほうに向いていた。

――――どうして、ここに僕は居るんだろう。
――――いっそのこと遠くの世界にいってしまいたい。
――――周りの流れに押しつぶされそうでいやだ。

【4】

ある放課後、アイツとまた家まで帰ることになった。話といっても、今は特にない。実は僕もアイツも受験の話題にはこりごりだったし、かといえ何か話題を出すのでもない。ときおり、何気ない景色の変化を見て小さくつぶやく、そんな帰り道だった。
アイツが急に、家に誘った。

「なぁ、今日俺んちに行かないか。」
「ん、別にかまわないけど。」

アイツの家に着いた。僕は隣にある自分の家に、玄関にそのまま荷物を投げ捨てて、アイツの家に入った。
相変わらず、こぎれいな家。僕の古い家屋とは違う、新しい家のにおい。アイツの希望で勝手にこの街にきたとは言っていたが、それが通るにしてはずいぶん綺麗な家だ。アイツの両親は、やはりお金持ちの部類なのだろうな。そう思った。
玄関に入り、リビングにいたおばさんに軽く「おじゃまします」と挨拶をして、すぐさま2階にあるアイツの家に入った。
部屋は異常なくらい綺麗にされていた。あいつのおばさんがマメに掃除をしているのか、アイツが綺麗好きなのかは分からなかった。
当時のトレンディドラマに出てくる大学生の部屋、そんな感じだっ

た。
その部屋には、色んな本が置いてあった。それこそいろんな本である。ジャ○プ関連など漫画本もあれば、経済学の本、医学の本、量子物理学の本、理系だけかと思えば、なぜか「論語」とかもおいてある。街中の図書館でも置いてないような本もあった。
「これ、全部読んでるの？」
「一通りは読んでみたけど、ほとんどよくわからないよ。家の親が買ってくれるんだ。興味あるのは何度も読んでるけどさ。」
ゲームはまるっきりなかった。アイツいわく「面白くないからいらない」って話だ。こいつは頭がおかしいんじゃないのか。

この、大学生部屋の中で、僕とアイツは本当にどうでもいい話をした。クラスの女の子がらみ、最近あった面白いこと、テレビ、本のこと…ゲームの話題だけは止めといた。
「…アイツ、どんどん胸でかくなるよな。」
「…あぁ、中学生のものじゃないよな」

「…あの芸人つまんないのに、なんでそんなにテレビに出てくるんだろ」
「…さぁね。まぁ、一発屋で終わるだろうな。」

「…バ○キは、あれは格闘漫画なんだろうか、俺にはギャグ漫画にしか見えない。」
「…あれは、正統派ギャグだろ。」

「…ヘッセの『車輪の下』とか読んだ？あれはかなり面白いぞ」
「…そうかぁ、あんな堅苦しい小説を見るくらいなら、俺は手頃なライトノベルを見るね。」

アイツが話題を出し、僕が返答を返す。ただそれだけなのだけど、

別にイヤじゃなかった。クラスの奴らとは違い、あいつだけは僕の好きな話題に近い話をよく振ってくれたからだ。会って数ヶ月で、友達となった割にはよく話してるよな。
そんな話を続けているうちに、夜になった。アイツは「飯食ってけよ」といったが、さすがにそれは遠慮した。人の家のご飯を食べるのはいろいろと緊張するからだ。余計な気を使うから。
玄関を出るときにアイツは言った。
「もし家から出られたら、あの林に行かないか？」
「出れたらな、なんで？」
「…ちょっと面白いやつをみせてやる」

家に入った。玄関に乱雑に置いた荷物のことで母親に怒鳴られながら、僕は部屋に戻った。着替えをして、晩飯を食べる。あぁ、家だな落ち着くな。食べるだけ食べて、僕は「ちょっと散歩してくる」なんていいながら、外に出た。母親には「ちゃんと勉強もしなさいよ」なんて言われながら。

寒い…

少し歩いて、いつも下校時によくみる林に着いた。あいつはどこだろう。
林に入ると、何か小さな光が見えている。懐中電灯の光だろうか。それにしては色が違うな。こんなに緑色をした懐中電灯なんてあっただろうか。
アイツは、林の奥で待っていた。アイツの足元には先ほどの小さな緑色の光があった。

「おう。」
「なんだよ、その光。」
「これね、まぁ見てくれ。」

アイツは地面に座り、光の中心を押した。すると、小さな光はどんどん上に上がっていった。光は2メートルくらいで止まった。なんだろうか、これは。なにか大きな壁、いや扉か。
僕があっけにとられているうちに、アイツは口を開いた。
「実は、俺はこの世界の人間じゃないんだ。」
「この門は『次元の門』っていうんだけど。…まぁそこら辺は多分忘れるから気にしなくていいよ。この門を使って、この世界のほころびを直す仕事をしているんだ。」
僕は何もいえなかった。やっぱりこの男は頭がおかしいんじゃないだろうか、いや頭がおかしいのは前からだな。
「信じてくれてもくれなくてもかまわない。とにかく、僕はお別れを言いにきたんだ。俺の親となってくれた人には、後で謝っといてくれ。っていってもその記憶すら消え去るだろうけど。」
アイツは呆然としている人形のような僕を相手に、どんどん自分のことを説明して言った。世界のほころびが酷くなっている。何が原因か分からないから、この数ヶ月間調査のためにこの街にきたのだということ。街の色々なところで、ほころびに繋がる次元のひずみ、人々の変化を見てきたということ。実は、僕が原因になっているかもしれないということ。
僕？
恐る恐る、僕は口を開けた。
「なんで…僕なんだ？」
「君は、今はただの中学生だけど、あと20年で、世の中には決してよくないことを引き起こしてしまうんだ。実は君を影で動かしている上位次元の人がいるようなんだけど、それはだれかはわからない。とにかく、20年後の出来事を防ぐために、今、この時代を君の近辺から調査していたのさ。」
「そうか…僕が…」
僕は聞いた。

「ちなみにその問題は教えてくれないのか。あと、その原因は断ち切ったのか。」
「原因は断ち切ったかどうか…まだわからない。君の何がそうさせるかは僕からは直接言えない。」
納得はできなかった。第一、何で僕が、世の中をひっくり返すようなことができるのだろうか。その原因はなんだろう。自分の心の中にある、弱さなのだろうか。それとも、自分の中にある純粋さだろうか。
「まぁ、とにかく今は今の君らしく生きるほうがいい。」
「…そうか」
「さて、もうそろそろ時間だ。行かないとな」
「なぁ、ひとつ質問なんだけどいいか？」
「ん？答えられる話ならいいぞ。」
「俺に問題があるなら、俺を消せば済む話じゃないのか？」
「…いや、君を消すということは、この世界に存在している歯車を乱すことにつながるから、それはできないんだ。俺みたいに静かな奴ならなんとでもなるんだけどさ」
嘘付くなよ…
「まぁそれは冗談として、上位次元にいる僕の存在や記憶は、今日この扉を閉めた瞬間に消える。もしかしたら、君のように近くに居た人たちは、なんとなく俺のことを覚えているかもしれないけど。ほとんどの人間は僕と話をしたことすら忘れてしまうはずだ。」
「お前はそれで平気なのか。」
僕は聞いた、急な話すぎる。
「おれは平気さ。俺は『死』という概念もなければ、『つながり』というものも感じれないのだよ。といっても、ここに来る前に、そういったものを意識するように訓練されてきたけども」
「…」
「まぁだけど、ここにきて、やっぱり感じるところはあったよ。人とのふれあいってのは思ったほど悪くないな。あと、まぁこれは君

に言ってもわからないかもしれないが。なぁ…死ぬ瞬間ってのはどういうものなんだろな。」
「…さあな、死んでみないとわからんな。」
「じゃあ、本当に帰るよ。またいつか会えたらいいな」
「僕が覚えていたらな」
「じゃあな」
「じゃあな」

アイツは扉を開いて、光の中へ飲み込まれていった。

【エピローグ】
あれから２０年が過ぎた。ふと、中学のころを思い出してしまった。アイツは結局なんだったんだろう。翌朝、アイツの家に行こうとしたら、「家には子供は居ませんよ」なんて話が記憶に残っている。今、僕は東京で、一人暮らしをしている。友達はどんどん僕から離れていき、今近くで飲むような間柄もいない。唯一好きだった女の子もいたけど、その子も、母親に薦められた男性を紹介され、今は幸せに暮らしている。
いろいろな出来事があった。社会人としてやってきたけど、どうも上手くいかなかった。日本の社会が腐ってるせいだと思ってしまったこともあったけど、別に悪いのは日本のうえの人たちだけではない。僕にも原因がある。だからこうして、死に際をさまよっている。仕事はない。家賃もずいぶんと滞納している。借金がないだけいいか。夢だった本屋にも勤められず、日銭をバイトで稼げていたけど、それももう難しくなってしまった。
次第に、自分のことがわからなくなった。そうしているうちに、生きていることには興味がなくなってしまった。だから明日には死のうと思う。
ただ、自殺するならどこでもできる。問題は自分のなきがらがどこか迷惑のかからない場所にあればいいのだ。樹海か？いや、あそこ

はだめだ。いつかバレるし、行くのも大変だ。
あの林か…
そうだ、自分で穴を掘り、土に埋まってから、手首でも切っておけば勝手に死ぬんじゃないか。
（…そんなことをしても、誰かに見つかるだろうに。）
そうだ、そうしよう。あの林の奥まで行って、静かに逝こう。もう親も死んで居ないしな。親の死に目に会えなかったな…

僕は、残り少ないお金を使い、故郷に戻ってきた。そこで、林に入った。

林の奥に行く。何か昔ここを通ったような気がする。なぜそんな記憶があるのだろう。今はどうだっていい。誰とも縁がない人生なのだ、これでフィナーレとしよう。僕は静かなこの林で、静かにあっちの世界にいく。そしていつまでもこの街を見守るのだ。
林の奥のほうに小さな光が見えてくる。紅い、発光ダイオードとも違う不思議な光だ。どうしてあそこに光があるのだろう。
僕は、そこへ行き、その光がある地面を触ってみた。

――すると、扉が出てきた。

扉が開く、そこで見たのは…ああ、アイツがいる。変わらない姿で、変わらない笑みを浮かべたあいつが居る。なぜだ？
「…あ。」
アイツはひとこと、言った。

「お前、バカだろ。」

ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｇ．ｇｏｏ．ｎｅ．ｊｐ／３２０ｙｏ／ｅ／６１５ｅ８３ｃ６３ａ６３４ｃ１ｅ２ｆ６ｂ８７５２５１１４ｅ６

7
e

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5714j/

扉の向こう

2010年10月15日00時09分発行